

米軍統治下沖縄のメイドたち

家事労働者と軍労働者の狭間で

○立命館大学・日本学術振興会特別研究員

佐草智久

1 目的

本研究の目的は、かつて米軍統治下沖縄において多くの女性が従事していた、メイドの実態について、明らかにすることである。米軍統治下沖縄については、未だ十分に研究されていない分野が少なくなく、女性史研究、家事労働者研究、ホームヘルプ研究もその一つであると考えられる。メイドが当時の沖縄社会において広く認知された、一般的な職業であった。

最盛期では14,000人前後の女性がメイドの職に就いており、この数字は実に当時の軍労働者の1/6にのぼったという。当時の彼女たちについて明らかにすることは、戦後沖縄の女性史や軍労働の歴史において不可欠だけでなく、戦後の日本の女性労働史、家事労働史を考える上でも極めて重要であると考えられる。しかし、多くが『宜野湾市史』をはじめ一個人の戦後体験の一つとして記録される程度に留まり、体系的な調査を実施し広く詳細を明らかにした研究は十分に為されているとは言い難い。

2 方法

2017年5月～2018年3月に計4回（延べ40日間）にわたり、沖縄県公文書館、沖縄県立図書館にて資料調査を実施。また同期間中に沖縄市内全37自治会に調査協力を依頼し、メイド経験者全13人に、半構造化面接法によるインタビュー調査を実施した。資料調査の文献分析を中心にを行い、不足したデータを保管する形でインタビュー調査の聞き書きを用いた。

3 結果・結論

メイドには一般兵の住む集合住宅で働く「兵舎メイド」と、将校クラス兵の家庭で働く「ハウスメイド」が存在する。共に就職経路は知人の紹介や職安のほか、自ら基地内の労務所（現在のLabor Office）に赴き紹介を受ける者もいた。一部の基地や自治体が独自のメイド養成所を開設したほか、公共職業訓練所もメイド養成を行うなど、当時の沖縄全体でメイド養成がなされていた。仕事は兵舎メイドでは時代・場所共に問わず同様であり、兵舎内には「ハウスボーイ」「クリーニング・ボーイ」と呼ばれる同様に就く男性もいた。また業務量・給与共に非常に多かった反面、昼間の米兵不在時に仕事するため英語を話す機会に乏しく、60年代以降の軍労働者大量解雇において真っ先に対象となり、再就職出来ない者も少なくなかった。

一方ハウスメイドは各家庭でかなりの差異が見られ、米人家庭との不和及び帰国などを背景に複数家庭の勤務経験者が多かった。賃金は安くとも家庭からのプレゼントなど仕事以外の面で利点があったほか、米人と接触する機会が多い分語学力が身に付き、それを活かしてタイプライターなどより上級の職に就く者や、離職後も事務職をはじめ他の軍労働に就く者が少なくなかった。だが家庭において、時には性的被害の対象になることもあり、若い女性故のリスクも存在した。

なお両メイド共に、経済成長による女性の職業選択の幅の広がりを背景に、次第にメイド不足が常態化し、また出産・育児などを理由に退職した者で、その後メイドに復職した者は殆どいなかった。

以上から「メイド」と言う職の多様性、「家事労働＝女性労働」と必ずしも言えない当時の実態が浮き彫りとなった。また両メイド共に家事労働者としては共通するものの、一単純作業以外で一定の英語力が問われる軍労働者としては、両者の間でその後のキャリア形成に大きな違いが見られた。

主要文献

琉球政府労働局, 1971, 『軍関係メイドの実態調査報告—71.6/1 現在』.